



さんじょう

八戸市立三条小学校
令和2年度学校だより
第26号
令和3年 3月15日
TEL 27-2216

未来につなげる思い

校長 河村雅庸

今年度の授業日も、残り2週間を残すのみとなりました。今週末には、学校の教育活動で最大の行事となる卒業式を迎えます。当日の在校生の参加は5年生のみとなりますが、それぞれの学年の子どもたちが、思い思いの感謝の気持ちを6年生に伝えています。

さて、先週9日（火）の全校集会（放送）で、八戸市防災教育の日に関する講話をしました。その数日前、「今年は、東日本大震災から10年目。子どもたちにどんな話をしようかなあ」と考えていたところ校長室に来客がありました。三條目町内会長であり、地域学校連携協議会委員であり、元三條小学校長である小関先生です。小関先生からは、何度か10年前のことを伺っていましたが、校長室の金庫に当時の記録ファイルがあるということを知り、さっそく探し出し、目を通しました。そして、そのファイルに綴られている大地震発生時に三條で起こった出来事を伝えることにしました。

大地震が起きた10年前の3月11日、私たちの三條小学校ではちょうど今日のように卒業式の練習が行われていたり、帰りの会をしたりしていました。そして、14時46分、これまでに体験したことのないような、大きく、そして、長い揺れが襲ってきました。揺れがおさまった後、全校児童が寒空の下、校庭に避難しその後、お家の方々が次々に迎えにきたという記録が残っています。また、地震による停電と津波警報のため・・・(中略)

ところで、大地震のその日、八戸駅にいた県外の多くの方々が、新幹線が止まったため、帰れなくなりました。また、停電のため、駅前のホテルなどにも受け入れてもらうことができませんでした。そのとき、その方々の避難を受け入れたのが、私たちの三條小学校でした。体育館を避難所として開設し、約150人もの人を受け入れ、三條の地域の方々や消防団の方々、先生方が避難してきた人たちのために協力して働いたそうです。大変寒い日でしたので、電気のいらぬいダルマストーブをまわりからいくつも集めてきたり、発電機を使ってあかりをともしたり、毛布を集めて配ったり、そして、婦人会の皆さんが炊き出しをして温かい食べ物を避難者に配ったりしたそうです。迎えのバスが準備できるまで二日間もの間、このような三條地区の方々の温かな支援が続いたということです。

自分たちの生活も大変だったのに、素晴らしいことですね・・・



その後、三條小学校の児童が、津波の被害に遭い避難所で暮らす岩手の被災者へ88通のエールの手紙を送ったことも伝えました。(当時の新聞記事から、その当時6年生だった留目亜美さんの手紙を紹介しました)

大きな被害をもたらした大震災でしたが、あのような災害の中でもルールを守って助ける日本人の姿が外国の方々から称賛されましたし、また、『絆』という言葉の意味が、改めて実感されたときでもありました。

10分ほどの講話の最後をこう閉じました。

「10年前の東日本大震災のときに、私たちの三條地区の皆さんが行った温かな支援があったこと、そして、津波の被害で避難を続ける震災地に励ましのエールを送った先輩がいたことも忘れずに、防災への気持ちを高めていきましょう。」と。

当時2歳だった6年生に10年前のことを聞いたとき、ほとんどの子が「覚えていません」と答えました。あの震災の記憶や教訓、そして、人と人との温かな支え合いがあったことを、いつまでもしっかりと伝えていかなければならないと、改めて思っています。